

1. 御言葉に従って (1～11節)

復活された主イエスがティベリアス湖畔で、七人の弟子たちと出会ってくださる。そして、大漁の奇跡を見せてくださる。このことが、これから使徒として福音宣教の働きへと派遣されていこうとしている彼らにとって、決定的な意味をもつことになるのである。

彼らは漁のプロであったが、夜通し働いても何ひとつ収穫を得ることができなかった。しかし、主イエスは彼らに仰せになる。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」(6節)彼らがそのとおりにすると、おびたしい魚が網にかかった。

ここには、人間を漁る漁師として召され、伝道の働きにたずさわる者たちがわきまえるべき、きわめて重要な原則が示されている。教会が伝道のわざを担おうとするさいに、時代をこえて覚えられるべき真理である。すなわち、伝道のわざは主の御言葉に従ってなされることによって実を結ぶということである。

伝道の困難ということがしばしば話題となる。ともあれ、教会は自身の経験や技術を頼りにして、小手先で事に当たるべきではない。御言葉に従うとき、わたしたちは聖霊を受ける。聖霊が新しい、根源的な力を与えてくださる。そのとき、福音宣教の働きは豊かに祝福されるのである。

伝道は神のわざであり、霊の収穫は御言葉への服従の報いとして与えられる。神のわざは神ご自身において始められなければならない。人間が神に代わって主導権を握ることができるかのように考えるとき、そこでは網いっばいの収穫を期待することはできないであろう。真に人の魂をすなごる働きを担うこともできないであろう。御言葉に従うとき、主はわたしたちとともにおられる。何事をなすにしても、それが最も重要なことなのである。

このことは伝道のわざにとどまらず、信仰者の担うあらゆるわざに妥当するであろう。信仰者の

生涯は御言葉に従い、御言葉に賭ける生涯である(ただ信仰によって、御言葉に従って旅立ったアブラハムのことが思い起こされる)。地上の歩みのおりおりに御言葉に従って生きることで、主はわたしたちの生涯を豊かに祝福し、とどのえ、導いてくださる。わたしたちが自身の手の中で自分の人生を操るというのではない。神が語られ、わたしたちが信仰をもって従う。この単純素朴ないとなみが信仰者の人生に美しい軌跡を描くのである。教会も、キリスト者も、そのようにして生きるのである。

わたしたちは日々の生活において、人の言葉を優先させているだろうか。それとも神の言葉を優先させているだろうか。わたしたちが最後に聞き従うべきはこの世の、あるいはわたしたち自身の言葉ではなく、神の言葉であることを覚えたい。

2. 主がともにおられる (12～14節)

よみがえられた主イエスは、陸に上がった弟子たちと食事をともにしてくださる。ここでわたしたちは、主の日の礼拝における聖餐の礼典を想起することができるであろう。

主イエスは、わたしは命のパンであると仰せになる。主イエスはわたしたちが生きるために、ご自身の復活の命を分け与えてくださる。主の食卓につらなる者たちは主に結ばれ、文字どおり主とひとつにされる。生ける主が聖なる食卓に臨在したもう。

それゆえ、わたしたちはもはや主はどこにおられるのかと探し回る必要はない。復活の主が、わたしたちの霊の目を開いてくださったゆえに、わたしたちにはわたしたちとともにおられる主のお姿が見えるのである。最後の晩餐の食卓にあっては、なお弟子たちの目は閉ざされていた。しかしこの朝の食卓では「弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである」(12節)。

わたしたちには、復活の主を見る幸いが与えら

れている。主を見るとはどういうことか。主とともに生きることである。主の命を受け、主との生命的な交わりに生きることである。わたしたちを罪から救い、わたしたちの命を生かすために十字架に死なれ、よみがえられ、永遠に生きておられる救い主がわたしたちともにおられる。わたしたちを愛し、わたしたちを慰め、励まし、力づけ、いかなるときにもわたしたちの命を守り支えてくださる。その幸いに生かされて生きることである。

加えて、もうひとつのことがある。わたしたちは主を仰ぎ見る祝福にあずかるのみならず、兄弟たちをも霊の目をもって見る事ができる。主に結ばれ、主のもとでともに生きるおたがいを、よ

みがえられた主イエスの光のもとで見ることができ。兄弟姉妹たちの一人一人を主イエスによって贖われ、主イエスにあって復活し、主のものとして、主イエスに合わせられて生きる存在として見る事ができる。聖なる人間として、いわば終末的なまなざしをもって見る事ができるのである。

聖徒の交わりはそうしたまなざしのもとで築かれていく。そしてそこでは罪の赦しの恵みが、さらにおたがいが主において仕え合う兄弟愛の祝福が、現実のものとなってあらわれるのである。復活の主がともにおられることのできる確かな慰めが豊かに分かち合われるのである。 (木下裕也)



(単元のねらい)

復活された主イエスがティベリアス湖畔で、七人の弟子たちと出会ってくださったことを記す箇所である。ふたつの場面が描かれる。大漁の奇跡を見せてくださった場面と、朝の食事をともにしてくださった場面である。「単元の目標」にあるように、いずれの場面においても弟子たちとともにおられ、彼らを慰めてくださる主イエスのお姿を見たい。そしてわたしたちも主にある慰めにあずかりたい。

ともにおられるイエスさま

十字架に死なれたイエスさまは、三日目に墓をやぶってよみがえられました。よみがえられたイエスさまは、弟子たちにもそのお姿をあらわしてくださいました。

よみがえられたイエスさまにお会いしたとき、弟子たちはどんなにうれしかったことでしょう。イエスさまが十字架につけられたとき、彼らはイエスさまを見捨てて逃げてしまいました。どんなことがあってもイエスさまに従っていきと言っていたのに、怖くなって逃げてしまったのです。イエスさまを裏切った罪に打ちのめされて、彼らは生きる望みを失っていたのです。

その弟子たちに、復活のイエスさまはみずから出会ってくださいました。そしてそのお体に刻まれた十字架の傷あとを示して、これはあなたがたの罪が贖われ、赦されるためにつけられた傷なのだ、わたしはあなたがたのために死ぬほどにあなたがたを愛しているのだと、そしてわたしがよみがえったことを信じるなら、あなたがたは罪赦されて永遠に生きるのだとおっしゃったのです。これほどに喜ばしい知らせはありません。復活のイエスさまを仰いで、弟子たちはもう一度息を吹き返したのです。命の希望に満たされたのです。そして、この赦しと命の喜びを人々に語り伝えるために、これからは伝道者となって召されていくのです。

今朝の聖書の箇所には、よみがえられたイエスさまが、湖のほとりで弟子たちとふたたび出会っ

てくださったときのことが書かれています。彼らは漁をしていました。けれども、夜通し漁をしても何もとれませんでした。

イエスさまは彼らに近づいて言われました。舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば魚がとれる。弟子たちはイエスさまがおっしゃったとおりにしました。すると、網を引き上げることができないほどにたくさんの魚がかかったのです。

この大漁のみわざによって、これから伝道者として、人間を漁る漁師となってこの世に遣わされていこうとしている弟子たちに、イエスさまはとても大切なことを教えてくださいました。それは、福音をのべ伝える働きはイエスさまの御言葉に聞き従うときにこそ豊かに祝福されるということです。

この世に救いと命の知らせをのべ伝える。それは、神さまご自身がなしていかれるお働きです。もちろん人間もその働きに仕えます。わたしたちも福音をのべ伝えます。でも、わたしたち自身の知恵や力や計画によっては、そのわざはなし得ません。弟子たちは漁のプロでしたが、自分たちの経験やわざに頼って夜通し働いても、魚は一匹も網にかかりませんでした。イエスさまの御言葉に従って網をおろしたとき、おびたしい魚がかかったのです。

多くの魚は、御言葉に従う信仰の実りとして与えられました。わたしたちは覚えておりたいのです。わたしたちのすべてのわざは、イエスさまを信じる信仰によって意味をもち、実を結びます。

御言葉に従って生きるとき、わたしたちの命のいとなみは豊かに祝福されます。

イエスさまはわたしたちに問いかけておられます——あなたは人の言葉を優先させますか。それとも、わたしの言葉に従いますか。イエスさまの御言葉に聞き従って歩むとき、イエスさまはわたしたちとともにおられます。そして、新しい力を与えてくださいます。死に勝利してよみがえられたイエスさまに結ばれて、わたしたちも永遠の命に生かされて生きるのです。これほど心強いことはないのです。

さて、イエスさまは陸に上がった弟子たちとともに、朝の食卓を囲んでくださいます。みずからパンと魚を分け与えてくださるのです。イエスさまが、信じる者たちとともに食事をしてくださる。このことについて、わたしたちは主の日の礼拝での聖餐の食卓を思い起こすことができます。

聖餐の食卓において、イエスさまは信じる者たちにご自身の命を分け与えてくださいます。そして、なんとすばらしいことでしょうか。そこでは、もう主はどこにおられるのかと探しまわる必要はないのです。この食卓に集まる者たちには、イエスさまのお姿が見えるのです。今ここでイエスさまはわたしたちとともにおられる——そのことがわかるのです。イエスさまがわたしたちの霊の目を開いてくださるからです。

イエスさまを見る。肉の目ではなく、開かれた霊の目をもって復活のイエスさまを見る。それは、イエスさまの命を受けるといことです。イエスさまとともに生きるということ。イエスさまを信じること、イエスさまを愛すること、その喜びと恵みとをあふれるほどに身に受けて生きるということ。

どんなにつらいときも、苦しいときも、悲しいときも、イエスさまがともにおられます。わたしたちを罪から救い、わたしたちの命を生かすために十字架に死なれ、よみがえられ、永遠に生きておられる救い主がともにおられます。わたしたちを愛し、わたしたちを慰め、励まし、力づけ、わたしたちとともに歩んでくださるイエスさまに結ばれて、わたしたちもおたがいに愛し合い、赦し合い、イエスさまの命を分かち合って生きることができるのです。

そのことを思うとき、わたしたちの心は喜びに満たされます。よみがえられたイエスさまを信じ、イエスさまに従って生きるとき、はかり知れない命の恵みがわたしたちに注がれるのです。イエスさまから来る確かな慰めがわたしたちの命の歩みを支えるのです。

ティベリアス湖畔の七人の弟子たちは、そのことの証人です。わたしたちの一人一人も、そのことの証人です。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 28章20節 (b)

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。



〈ねらい〉

イエスさまを信じることができるために、復活のイエスさまはいつも私たちをもてなして下さるお方であることを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

今回の御言葉の終わりの方に、こういう言葉が記されています。「弟子たちはだれも、『あなたはどうなただすか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである」(ヨハネ21:12)。読んでいて何だか嬉しくなるような、あるいはホッとするような言葉です。いや、私たち以上に、イエスさまご自身が安心しておられることでしょうか。やっとここまで辿り着いたのだね。わたしのことがやっと分かったのだね。

子どもたちは、福音書に描かれている弟子たちの様子を見ながら、どのような思いを抱いているのでしょうか。実際にイエスさまを見るのが弟子たちをうらやましいなど思っている子もいるかもしれません。私もベトロさんみたいにこれまで大事にしていたことを捨てて、イエスさまに従いたいなど憧れの思いを持っている子もいることでしょうか。でも、子どもたちの心に残る弟子たちの姿は、格好よくて立派な姿ばかりではないでしょう。イエスさまのお語りになることやなさることを十分に理解することができず、叱られてばかりいます。イエスさまが捕まったときも、助けずに、自分だけ逃げ出しました。復活したイエスさまが目前にいるのに、まだ疑っている。他にも色々数えてみると、多くの失敗や罪を重ねる弟子たちの姿があります。その度に、まだこの人たちはイエスさまを信じられないのか。情けないなど思う子たちもいるかもしれません。今日も箇所でも、

湖の岸に立っておられるイエスさまのことが、いまだによく分かっていないようです。

その日の夜、何も獲れず疲れ果てている弟子たちに、イエスさまは語りかけます。そして、そのお言葉どおりに、もう一度網をおろしてみると、大漁の魚が網に入っていたのです。この出来事をとおしてある弟子が、私たちに語りかけてくださったお方は「主だ」ということに気付きます。まだイエスさまのことが分からない自分たちのことを叱ることなく、分かるようになるまで忍耐強く御言葉を語ってくださいます。その言葉に従うとき、イエスさまのことが分かるようになります。またイエスさまは漁から帰って来た弟子たちをもてなすために朝食の準備をしてくださいました。弟子たちは、イエスさまが用意し、もてなしてくださった食事を共にしたのです。その豊かなもてなしの中で、もうイエスさまについて疑い深い問いを抱く弟子たちは誰もいませんでした。

またこのことは、「漁師」という言わば日常の働きの中で、イエスさまが共にいてくださり、イエスさまのお姿が見えなくなっている弟子たちをもてなしてくださった出来事でもあります。教会の礼拝でお会いするイエスさまは、家庭や学校で起こる一つ一つの歩みの中にも共にいてくださるお方です。そのお姿はすぐには見えないかもしれませんが、そこでイエスさまが語りかけてくださるお言葉に耳を傾けてみましょう。きっとイエスさまのことが分かるはずです。

〈祈り〉

イエスさまのことが分かるようになるために、いつも私たちのこと見ていてくださり、待っていてくださることを感謝します。

〈展開例〉**1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。**

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」 マタイ28:20b

- ・わたしは誰でしょう。
- イエス様。
- ・世の終わりまで、とはいつでしょう。
- 百年後か千年後か、いつかわかりません。明日かもしれません。将来、イエス様がまた来られる時が世の終わりの時、世の完成の時です。その時までずっとということです。
- ・「あなたがたと共にいる」とはどういう意味でしょう。
- イエス様が教えてくれた戒めや勧めなど、私たちにこうしなさいと教えたことをしようとするときに、それができるようにイエス様がいつも守り、助け、導いてくださいます。例えば、旧約聖書では、神様が共にいるということは、困難の中でももうだめだという時にも神様が救ってくれたり、圧倒的に不利な戦いにも勝利し、神様が働いていて下さいました。それはいつも、律法（神の言葉）を守るなら、神様は共にいる、ということでした。イエス様が命じたことを成そうとするとき、イエス様が支え、助け、力を与えてくださいます。共におられます。だから勇気が与えられます。

2. 説教を分かち合う。**2-1. イエス様のことを考えよう。**

- ・復活したイエス様は、何をされたのだと思いますか。
- イエス様の言葉が本当だと、お弟子さんたちに信じさせようとなさいました。十字架につけられる前のイエス様本人がよみがえったことを教えるためです。それは、聖書がイエス様について証していることを伝えるためでした。イエス様は復活した後、誰にも会わないで天に昇ろうとなさらず、ちゃんと弟子たちにお会いになっ

たのです。

- ・イエス様は今日の箇所です。復活したことを証しするために、何をしましたか。
- 網を右側に打つこと、食事を共にすること。

2-2. お弟子さんのことを考えよう。

- ・お弟子さんたちは、イエス様に会っても最初はわかりませんでした。やがて分かりました。それはどうしてですか。
- 以前、イエス様がなさっていた御業、御言葉の力を経験したから。それは、イエス様が言われたとおり、網を右に下ろして大漁となったからです。もし、イエス様の言葉を優先せず、自分の言葉（もう魚はとれない）を優先させていたらイエス様が共にいると気が付かなかったことでしょう。
- ・お弟子さんたちはイエス様が共にいることに気付いていましたか。
- 気付いていませんでした。しかし、イエス様の言うとおりにして、その言葉の力を知ったときに、共にいることに気付きました。でも、イエス様はお弟子さんたちが気付く前から共にいました。
- ・お弟子さんはイエス様と食事をしましたが、前回食事をしたときはいつでしたか。
- 主の晩餐。

2-3. 私たちのことを考えよう。

- ・私たちは、天におられるイエス様を見ることができませんが、共におられることをどこで知りますか。
- イエス様の言葉と共に、神様の力が表れることを通して。そして、聖餐式において、臨在してください。

3. ゲーム

しんぶんじゃんけん。ただし、じゃんけんに勝ったら、たたんである新聞を一回分広げる事ができる。一番大きく開いているなら、そのまま。